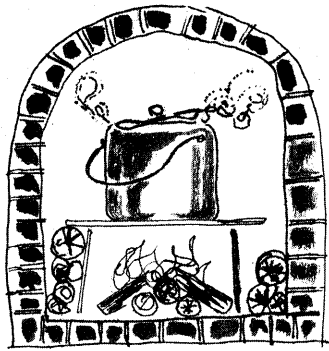


ふくろうのつぶやき

——育つには、時とリズムが——



真壁 伍郎

だれに頼まれたわけでもないのに、文庫をやっているのが楽しいと聞かれれば、即座にこう答えましょう。育つてゆく子どもを見ること。そして、(ちよつと声を低めて)、妻と一緒に文庫をやっていること。

もちろんそのほかにも数えたられば、楽しいことはいくらでもあります。本を読んだり、眺めたり、途方もないお話に、大人であるわたしが妙に感動してしまったり。でも、行き着くところは、はじめの二つです。

幼稚園や保育園へ行っていた子が、いつの間にか三年生、四年生になっています。一週間に一回の出会いを重ねているうち、ある日、ある時、子どもはびっくりするような成長した姿で、わたしたちの目の前に立っているような気がしてなりません。

子どもが成長するのは、決して直線的ではないなど、いつも考えさせられています。

もう一つの喜びについて触れておかなければなりません。これはもう、面白い、なるほど、と思わされるといふしかありません。女性の目が子どもが育つのをどう見

ているのか、まして、それが幼稚園の先生であればと、あれこれ例をあげるいとまもないくらい、たくさんのことを気づかされ、教えられています。

この先生、といっても、妻のことですが、庭いじりが大好き。暇さえあれば、庭に出てあれこれ草木の世話をしている。なんとかの花がきれいに咲いているわよ、と時折わたしに声をかけてくれます。こちらは仕事が一段落したらと思いつつながらそれを聞いているものですから、どうれ、と見にいって時には、かんじんの花の名前を覚えていないというありさま。

庭のことはだめでも、家の中のことならと、わたしは家の掃除に精をだします。自称、掃除大臣。子どもにまでそう呼ばれたりしています。わたしの家のあたりは、ほとんどが砂地です。文庫の部屋も、子どもたちの出入りが激しくなれば、いきおい砂でざらざらすることもあります。

「ほら、よく、足をきれいにして！」などと、掃除大臣がいくら注意しても、子どもたちは、どこ吹く風。よく

遊んでくる子ほど、砂だらけです。ある日、この大臣のいらいらを妻はさっと押しとどめてくれました。それもたった一言で、

「子どもが育つてことは、砂だらけになることよ」
なるほどと思ってしまう。以後、家の中に砂があるたびに、育っているな、育っているな、と思うことにしています。

フレibelが、キンダーガルテン（幼稚園）を創始したのは、一八四〇年のことでした。なにもこれが幼児教育の初めだったわけではありません。現にわたしが何度か訪ねていつている、西ドイツ、カイザースヴェルトのディアコニッセの「母の家」で、幼児のための教育が開始されたのは、一八三六年。その同じ年には、そこで、女性たちのための看護教育も始められています。近代看護の創始者といわれるナイチンゲールが学んだのもここでした。

もとはといえば、刑をおえた一人の女性の更生の仕事

から始まった、フリートナー牧師夫妻の働きが、やがて、看護、教育、福祉の分野にわたる女性たちの大きな活動と変わり、ここがその大切な拠点となります。この一連の働きの始まりを、ナイチンゲールは、こう語っています。

『われに汝の道を教え給え』とは詩篇におけるダビデの永遠の叫びである。神の道を見てそれを模倣しつつ仕事をするのは唯一の真の知恵である。小さな芽から森林樹になる過程は緩慢すぎて、その芽がいつ、どのようにして大きくなったかは誰にもわからない。フリートナー牧師は小屋の二つのベッドから始めたのであって、空中楼阁のような幻想から始めたのではない。カイザースヴェルトは、いまやその祝福とそのディアコニッセとをほとんどあらゆる新教の国々に広めている」

同じ時代に、同じように幼児の教育に手を染めることになった、フレibel (1782～1852) とフリートナー (1800～1864)。彼らはそろいもそろって、女性の能力と資質に深い理解と期待を寄せていました。それだけ

に、真剣に女性たちの教育のことも考えました。そのうち、ほとんどの女性の独壇場とさえなってしまう看護と幼児教育。その発端に、こうしたフェミニスト兼、高邁な理想主義者がいたことは、わたしたちがよく覚えておいてよいことでしょう。

ただ、幼児教育のありかたについては、残念ながら、二人は意見を異にしていました。

幼児の純真な存在のなかに、人間に生れながらにしてつきまとう罪の陰を認めるかどうか。そのあたりの違いが、具体的に、教育についての考え方、方法にあらわれてきます。事の当否は別として、結果的には、フレibelの考えのほうが、その後の幼児教育の流れをつくることとなります。

キンダーガルテン (幼稚園)。どうしてこの名が全世界に広まることになったのでしょうか。わたしは、かねがね不思議に思っていました。キンダー (子どもたち)、そしてガルテン (庭)。「花園によい花の芽ばえが育つように、子どもの園、キンダーガルテン」としたという説

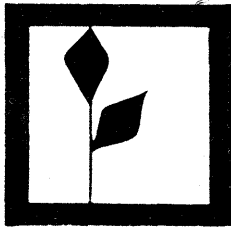
明を聞いても、なにかちょっと物足りない気がします。
たんなる可愛さか、咲いては散ってしまう、花のもろさ
を思うせいかもしれません。砂だらけの手足で動きまわ
っている子どもたちを見ると、もっと力強いイメージが
ほしいような気がします。

「育つには、時とリズムがあるね」

文庫の部屋のふくろうが、だしぬけに妙なことをい
います。だいたい哲学者とか、そういったたぐいの人間は
(そして動物も)、訳のわからぬときに、訳のわからぬこ

とをいうものです。

話をもとに戻しましょう。ナイチンゲールの言葉がき
っかけとなったのか、カイザースヴェルトのディアコニ
ー事業団はいま、伸びてゆく小さな木の芽を自分たちの
シンボルマークにしています。それを見ると、ぐん
ぐん伸びてゆく木を想像しています。やがては、その木
の陰に憩う人々もあることでしょう。たしかに、あの小
さな田舎町で芽ばえた看護や福祉が、いま全世界の人々
に恵みをもたらしています。しかも、それが主として女



性たちの手によって。

フレイベルが、キンダーガルテンの名を考えていたとき、彼の心には、庭師の姿が見えていたのではないかと
思います。しかも、女性のです。木や花が育つには、どんな世話や注意が必要か。庭師はこれを心得ています。せっかくの貴重な芽ばえを無にしてはなりません。自分に託された草木の種類と性質を知って、その成長のために、庭師はいつも配慮しています。

ドイツ語で、幼稚園の先生のことを、キンダーゲルテンリンといいます。キンダー（子どもたち）を取り去れば、ゲルテンリンは、女庭師の意味です。なるほど、フレイベルは、これを思っていたのか、とひとり合点しながら、庭仕事に精をだしている妻の姿をながめてしまいました。

料理がうまい人は、カウンセラーに向いている。そんなことを、あるカウンセリングの先生から聞いたことがあります。さまざまな材料をそろえ、手を加え、熱を加える。ほどよく煮上るのを待っていると、おいしいごち

そうができる。カウンセリングもまったくそのとおりだといえます。さて、この伝でゆくと、草木を育てるのがうまい人は、人を育てるのも上手なのかもしれません。看護婦さんたちのなかには、植物を育てるこつを心得ている人が多いようです。このひとたちの看護もきつとゆきとどいていくことでしょう。幼稚園の先生たちは、はたしてどうでしょうか。

大学の教育でいわれる、セミナーまたは、ゼミナール（演習）も、もとはといえは、苗を育てる所、苗畑の意味でした。苗が育ってゆくための水や栄養、日あたり、風。さらに不思議なことに、苗は一本よりも、何本か一緒のほうがよく育つ。そのすべてを心得、配慮できるのが、庭師ならぬ、大学の教師の仕事というわけです。どうも、幼児教育といわず、教育の根幹には、育つ芽と、それに注ぎ、配慮してゆく庭師の姿があるように思えてなりません。こうなると、育つためには、土や砂がついているくらいは、あたりまえです。わたしには、それがなかなかわかりませんでした。幼稚園の先生が、わたし

にそれを納得させてくれました。

育つといえば、ひとの育つのは早いものです。それにくらべて自分の老いは、なかなか見えないものです。幼稚園の頃、家へ遊びに来ていた久美子さんが、もう三人の子どものお母さんになっています。そして、そのまん中の娘のひろ子さんが、いまは熱心にわたしたちの文庫に來ています。

「あなたのお母さんも、あなたくらいするとき、よくおじさんのところへ来ていたんだよ」

ひろ子さんは、目をくりくりさせながらそれを聞いています。

「あなたのお母さんも本が好きだった。こんどお母さんから、子どもの頃の話、聞いてごらん」

小学校二・三年生くらいまでの子どもたちには、きまってお父さん、お母さんに、借りていった本を読んでもらいなさいといっています。(これが、子どもを本好きにする最良の方法です。いろいろな国の児童文学の本を読ん

でも、どれにも共通してこの重要さが語られています。

ぜひ大人たちに覚えておいてほしいことです。)そして、どの子にも、お父さんやお母さんの子どもの頃の話を書いてごらんとすすめます。

これに、うまく応じてもらえた子どもたちは幸せです。勢いこんで、お父さんはこうだったんだとき、と、報告してくれます。親も初めから親でなく、自分と同じ子どものときがあった。これが、とても不思議なのでしよう。そして親も語りながら、幼いときの自分の姿を思いかえしていたにちがいありません。これは、子どもたちが時の流れ、いのちの流れを学ぶ第一歩です。昔語りは、けっしてたんなる昔語りではありません。親はそれによって、自分のいのちのルーツに触れ元気づくでしょうし、子どもはこれからの自分の人生ストーリーを考えることでしよう。

子どもたちと向いあって話していると、普段なら思いもつかないようなさまざまなことが、子どもの頃の思い出そのままに、つきからつきへと心に浮んできます。

白雪姫のことにふれて、子どもたちにこんなふうにい
ました。

「白雪姫は、七歳になると、とってもきれいになったん
だって。おじさんは、ここにいるみんなもそうだと思う
よ。七つになると、お母さんなんか、かなわないくら
い、きれいになるんだよね」

子どもたちは、そうかなというような顔をしていま
す。ただ、七歳の子だけがこれを聞いて、にこにこして
います。

「おじさんは、昔から不思議だと思っているんだけ
ど、三と五と七ってのは特別だよ。だって、三月三
日、三・三は、おひなさまで、女の子の節句。五月五
日、五・五は、男の子の節句。そして、七月七日、七・
七は、七夕で、これはお姫さまと男の人が出会う日。み
んな奇数でさ。そして、一月になると、七・五・三。
面白いね。それにしても、三月のおひなさまが先ってこ
とは、女の子のほうが、先に大人になるのかな」。

まずは、学校では、決して話にはならないようなこと

を、このおじさんは、子どもたちと真剣に考えていま
す。

七歳の白雪姫が美しいという話は、本当です。グリム
昔話集を読んでもみると、この七歳の白雪姫に、まま母で
あるお妃は大変な嫉妬をしてしまいます。殺そうとする
のです。しかも、グリムの最初の版では、これが、まま
母ではなくて、実の母でした。そうなるといっそう、こ
の物語のすごさがでできます。七歳の子をもった母親と
なれば、少なくとも三〇歳。もうすでに、容色、日々に
衰え、といったところでしょう。

そう思ってみると、白雪姫の話は、実は、自分の衰え
を受け入れることができなかつた女性の話とも見ること
ができます。一方の白雪姫は、着実に、美しく成長して
いるのに。

子ども、そして人間の成熟には、リズムがある。それ
も七年を周期とするといったのは、最近あらためて光が
あてられるようになったルドルフ・シュタイナー（1861
～1925）です。これは、むしろ昔話や、わたしたちに古

くから伝えられてきているものの見方がそうだったとい
った方がよいかもしれません。白雪姫は、七歳になっ
て、成熟の一つの節目を迎えています。そのあと、七人
のこびとのところで、これもまた考えようによっては七
年。そして、思春期をむかえる一四歳になると、娘は長
い眠りについてしまう。同じグリムの「いばら姫」で
は、一五歳になると、姫はつむにさされて、百年間の眠
りについてしまうこととなります。一四歳が成熟の節目
という点では、これも一致します。

蛇足ながら、白雪姫のお話でお妃が鏡にむかって、

「鏡よ、壁の鏡よ、国一番の美人はだれじゃ」とたずね
るのも、全部で七回。ただ、ここではなんの進歩も成熟
も語られていない。外見の美しさしか追い求めえなかつ
た女性の悲劇です。

いずれにしても、七が一つのまとまりであり、その積
み重ねのなかで、育つということが考えられているよう
です。日曜日を週の初めの聖なる日とし、人は、一週一
週、人生の旅路をたどっているのだ、というキリスト教
の考えにも、明らかに大きな意味での「育つ」が含まれ
ているにちがいません。けっして、機械的な繰り返し返



しの七日ではない。繰り返しているようだが、それはちようどらせん状の階段を登るように、上へ上へと向っている。木でたとえるなら、大きく上に伸びていつている木には、目には見えなくとも、確実に年輪の輪が繰り返し刻まれている。

子どもたちが大きくなるのもそうです。からだが育ち、心が育つ。しかも、その節目、節目に、その時々顔がある。けっして平板に大きくなっていつているのではありません。葉が伸びる時には、葉が伸び、花が咲く時には花が咲き、実がなる時には実がなっている。それぞれ定まった時に、定まった内容を満たしている。そうでないと、けっして育っているということにはならない。大きくなるだけのことを成長というなら、その大きさにふさわしい内容を伴っているのが成熟です。そして、育つとは、この成熟のことをいうのだらうと思いません。

では、その成熟の時はいつ訪れるのでしょうか。いま述べてきたように、はつきり七年と定まっているのか。時

を時計ではかることに慣れているわたしたちは、七年というとき、すぐにその時間や月日を数えてしまいます。でも、そういうやり方で数えられない時がある。いのちが生みだされ、育つ（そして、死ぬのもの）のをしるす時です。それはいのちの内側から「満ちて」ゆくのであって、わたしたちはこの時を「待つ」しかありません。

赤ちゃんの誕生のことを考えてみればいいでしょう。予定日は分っても、何日の何時、何分と決めてしまうことはできない。わたしたちはただ期待をこめて、その時を待ちます。待つ側にも、時の高まりがあり、生れ出る側にも、高まってゆく時があるにちがいません。いのちを支配している「時」とは、このようなもので、この時はまた、「育つ」をも支配しています。人が計測可能な画一的な時の流れを時というなら、これはむしろ個別的な時の流れ、わたしたちの操作を拒む時だということができます。ですからわたしたちは、待つわけです。庭師は、この時に通じています。さらにいえば、女性たちは、この時については、男たち以上に通じているはず

です。生まれる場面、育つ場面、そして、死の床のかたわらに、なぜか女性たちは、「待ちつつ」居つづけました。

人が育っていくには、節目があり、段階がある。そして、それが不思議と、ある一定のリズムをもっている。シュタイナーのこの見方はなかなか面白く、ユニークです。たしかに子どもたちを見ているとそうだと思わされます。二年や三年ではなく、もっと長い時の広がりのおかげで、子どもたちの育つのを見れば、それがよく分ります。

具体的にいえば、こうです。
成熟は七年を一つの段階としても、その七年の間に、三のリズムが刻まれている。体の部分の備わりかたからしてそうです。生まれてくる子は、まず頭が一番よく整っている。つぎに大きくなるのが、胴。そして、そのあと手足がぐんと伸びます。頭・胴・手足、頭・胴・手足、それが一・二・三、一・二・三と、ちょうど三拍子

のワルツでも踊っているように、子どもは大きくなりながら、その中身を充実させていっています。そして、この三拍子の七年が三回めぐったところで二一歳、このあたりで大体は成人に達し、大人ということになります。

さらに、この三拍子のリズムを刻みながら、それぞれの七年の課題が備わっているともいえます。それこそ成熟の考えそのものようで、とても面白い。

こうです。七歳までの子どもは、生理的成熟を課題とする。ですから、この時期、健康の基本となるしつけを身につけなければならぬ。健康教育こそ第一です。つぎの一四歳までは、心理的成熟の時期で、情操を豊かにし、喜怒哀楽の感情を知り、心の安定を味わわなければならぬ。つぎの二一歳までは、社会的成熟の時期、なにをして、どう生きるか、その決断ができるだけの社会性を獲得していなければなりません。

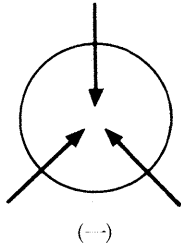
たしかに、健康でさえあれば、七歳の子どもは、その子らしい、実に整った姿をしています。この年ごろの子どもたちを見ていると、子どもという立派な作品がそこ

にあるという感じがします。

この時期を過ぎて、三・四年生になると、子どもの内側から出てくる押し出しのようなのが感じられ、急に、その子らしい存在感が増してきます。

子どもたちのこうした成熟の過程にともなう心のありようを見事に図示したものがありますので、ここで紹介しておきましょう。子どもの心の内側と外の関係を示したものです。

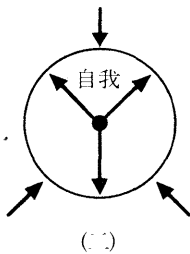
初めは(一)、外からの影響は、もろにその子のなかに入っていきます。これがしだいに、内に自我という種

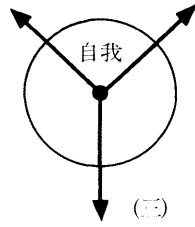


をもつようになり(二)、反抗したり、自分を主張したりするようになります。そうなるともう、外からの働きかけや影響は、子どものなかにストレートには入っていきません。子どもは子どもの内なる世界をもつようになります。「なにを考えているんだらう、この子は」と、

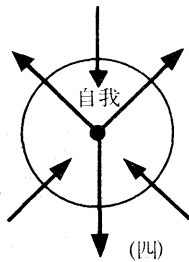
親はこれまでなにもかもあけすけに見えていた子どものことで、いらいらし始めます。でも、子どもにとって、この頃が一番夢をふくらまし、自分の心の世界にひたれる時期なのかもしれません。

つぎの段階は(三)、もう外からの働きかけは関係な





し。精一杯自分を外に向けて伸ばし、自分を主張してゆこうとします。そして、その伸びた手は、友だち、時には、異性に向けられます。親は寂しいですが、仕方ありません。思春期にあたるこの時期の子どもの心を宇宙ロケットにたとえた臨床家があります。ロケットが宇宙に向けて放たれるとき、ある一定の区間、いくらこちらから信号を送っても、全然交信不能のところがあるそうです。そんな時は、送りだしたときの方向と角度を信じているほかはない。この時期の親と子の関係を、とてもうまくいい当てていると思います。



さて、最後の成人した人の姿(四)。人からの働きかけも受け入れ、自分からも外に向けて働きかけることができる。まったくわたしたちのあるべき姿で、もう大人の理想像としかいいようがありません。

わたしは、時々、こうした図を思いうかべながら、子どもたちを見えています。みな、それぞれの人生の段階を生きているのだなあと、あたりまえなことなのにひどく心を動かされてしまいます。いま、どんなふうにもこの子たちのいのちのリズムは打っているのだろうか。やがて

年輪を重ねてゆく、その核となる中心は備わってきているのだろうか。でも、いまは小さいこの子たちも、やがては、大きく枝をはる樹となる。梢に天の風を受けては、ざわめき、木陰に、子どもたちを遊ばせ、また旅人を宿らせることもあるだろう。

「どうだね、森の木の一本一本が見えてきたかね」

森のあるじのふくろうは、思いにふけるわたしにこう呼びかけました。

(新潟大学医療技術短期大学部)

